

成熟を目指して(7) イエス・キリストの十字架について考える

2017年7月23日(日) 梶原剛

1.はじめに

おはようございます。

前回、神の臨在にふれる礼拝その3として、幕屋に設置された門、祭壇、洗盤についてお話をさせていただきました。出エジプト記やレビ記に教えられている幕屋やささげものについては、それぞれ意味があること、またイエス・キリストの生涯、十字架に関係していることについてお話しさせていただきました。聖書全体で66巻ありますが、最も古いもので約3500年前、最も新しいもので約2000年前に書かれた聖書が、誰か特定の人物によるコントロールを受けることなく、しかも旧約聖書が「後に来るものの写しと影」として驚くほどの調和をもって書かれていることは、驚嘆に値することです。一見、人が定めた宗教の儀式のように見えますが、実はその意味を探ると、ただ思いつきの儀式ではなく、一つ一つの器具や行為、ささげものが、意図をもって定められたものであることを学ぶことができます。その意図とは、ユダヤ人に対してやがて来るべきメシヤ待ち望み、そのための備えをするということでした。残念ながら、旧約聖書を読むと、ユダヤ人は幾度となく神の御手を拒み、自分たちにとって都合の良い選択を繰り返したことがわかります。しかし、それはユダヤ人だけの問題ではなく、私たちも同じことを繰り返しているのかもしれない。しかも、ユダヤ人に対する神の御手よりもはるかにわかりやすい神の御手、すなわちこのイエス・キリストの十字架が示されているにもかかわらず、この十字架と自分自身との関係について、簡単に考えているのかもしれない。

今まで何回かに分けて旧約聖書の幕屋やささげものについて一緒に学びましたが、今日は少しこの点についてはお休みさせていただいて、イエス・キリストの十字架について一緒に考えてみたいと思います。今日は特に、イエスが十字架に掛かる前に、ご自身の最期について話された記事をいくつか取り上げて、考えてみたいと思います。

2.あなたにとってイエスは誰か？

まず、本日のテキストであるマタイの福音書 16:13-20 をお読みしたいと思います。

16:13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」

16:14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」

16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

16:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。

16:18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

16:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

16:20 そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。

イエス・キリストには12人の弟子がいました。その中でも、このペテロは象徴的な存在であり、新約聖書にしばしば登場します。何かにつけ前に出る性格であったようで、この記事以外でも、ペテロが前に出た記事がいくつもあります。例えば、ルカの福音書9章の「変貌の山」と言われる記事では、イエスがペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて山（ヘルモン山）に登られたとき、イエスは不思議なことにモーセとエリヤが現れて、ご自分の最期について話されたと教えられています。その状況に驚いたペテロは、イエス、モーセ、エリヤの3人のために3つの幕屋を作ります！と言ってしまいます。そういうことが求められていたのではありませんし、この福音書を書いたルカも「ペテロは何を言うべきかを知らなかったのである」と教えています。要するに、言わなくてもいいことをよく考えずに言う性格であった、ということでしょう。別に悪気があって言ったことではないと思いますが、こういう感じで他の場面でも何かと言ってしまう性格であったようです。

ペテロは、このマタイの福音書16章で、イエスの「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」という質問に対して、「あなたは、生ける神の御子キリストです」と真っ先に答えます。ペテロがこの時点でイエスのことを生ける神の御子キリストである、ということをごどのように、またどの程度理解し、信じていたのかはわかりませんが、イエスの弟子という立場で考えるなら、最高の答えであったと思います。しかも、誰よりも先にこのように答えることができたのですから、ペテロにとっては鼻高々であったと思います。

皆さんにとって、イエスは誰でしょうか。イエスを誰と答えますか？

ペテロは、ここでまさに模範解答を答えることができました。ただし、彼はこの後で大きな失敗をしてしまいます。マタイの福音書16:21-23をお読みします。

16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」

16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

直前にイエスとの会話の中で模範解答を答えることができたことで有頂天になっていたかもしれないペテロにとって、下がれ。サタン。と言われたのは大変なショックだったと思います。21節では、イエスはご自分がどのように殺され、そして3日目によみがえられることを弟子たちに教えられました。もし、ペテロが本当に、イエスが生ける神の御子キリストであることを信じ、またペテロにとっても救い主であることを信じていたなら、イエスの言われたことを理解することはできなくても、イエスをいさめるようなことはしなかったはずで、人が神をいさめるなど、考えられないことです。

聖書を少し読まれば、あるいは何回か教会に来て聖書から話を聞かれば、イエスが誰か、ということについて聖書がどのように教えているのかを覚えていらっしゃると思います。教会に来ることがなくても、学校で歴史や宗教の授業で教えられることでもあります。『聖書が、イエスが生ける神の御子キリスト、すなわち救

い主であることを教えている』ということを感じる、記憶するのは難しいことではありません。しかし、本当に重要なことはそういうことではありません。本当に重要なことは、誰にとって、イエスが生ける神の御子キリストであるのか、ということです。言い換えれば、知っているかどうか、ではなく、受け入れているか、信じているかどうか、ということが重要なことです。もし、イエスは、他の誰かにとって、それは皆さんの父、母、夫、妻、子供、友達にとっては生ける神の御子キリストだそうだが、自分にとってはどうなのかかわからない、ということであれば、ぜひイエスがあなたにとっては誰なのか、ということについてしっかりとお考えいただき、今日、ご自分にとっての答えを持って帰っていただきたいと思います。

3.イエスはなぜご自分の最期を弟子たちに話されたのか？

さて今、あなたにとってイエスとは誰か、ということについてお話しさせていただきましたが、もう一度、16:21 をお読みします。

16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

イエスはどのような想いで、ご自分の最期について弟子たちに示されたのかと思われませんか？皆さんは、皆さんにとっての大変重要なこと、しかもそれが皆さんの命にかかわるような、あるいは重要な進退にかかわるようなことを、第三者にお話しになったことはありますか？

少しだけ、プライベートなお話をさせていただきたいと思います。私は、幸いなことに今まで生死にかかわるような大病を罹ったことがありません。それでも、毎年受信する健康診断の結果については、年ごとにその封筒を開封するときにごときごときしてしまいます。若かったときは何一つ異常がなかったのですが、30代、40代、50代と年を取るにつれて、少しずつもう一度検査してください、とか、経過を観察してください、または治療してください、というメッセージが増えてきます。そのようなメッセージが増えてくると、やがて生死にかかわるような大病が見つかるのかもしれない、とってしまいます。

11年前に私の父は他界しましたが、他界する2カ月前に突然脳幹脳梗塞で倒れました。倒れる2日前の様子がおかしくて、病院に連れて行ったのですが、その時点での検査では何も見つからず、夜中に父を家に連れて帰りました。そして、その2日後に意識を失って、救急車で病院に運ばれたときに検査を受けました。医師から脳幹に脳梗塞が見られ、脳幹の大半にダメージがありもう回復することはない、と突然告げられました。今でもその時のことは忘れられないのですが、父はその後2カ月必死で生きたと思います。父は小さい会社を営んでいましたので、倒れたのは67歳でしたが現役で働いていました。倒れてからはほとんど反応がない状態でしたので、私がか会社の従業員や取引先に父の病状を連絡しました。皆さんにお伝えしたことは、今の意識がほとんどない状態からよくなることはない、そしていつ死んでもおかしくない、ということでした。家族だからこそ、病院のベッドで寝ている父を見て、無理にでも希望を持とうとしますが、医学的に冷静に考えれば希望を持つべきではないという状況であったと思います。本人はほとんど意識がなく、話すこともできなかったため、私が代わりに周囲に説明して回りましたが、もし自分で説明することができる状態であったとしたら、父はどのように自分のことを周囲に話したのだろうか、と思います。私が取引先を訪問して説明したことは、父はもう会社を継続することはできないし、会話することもできない、事業を今のままで継続することはできない、ということです。シンプルに言えば、会社はもうおしまいだ、ということです。父の会社であっても、その最

後を取引先に伝えるのは大変重たい話ではありますが、事業を円滑に終了させるためには、早めにお伝えしなければなりませんので、重たい足を引きずるように訪問したことを今でも昨日のことのよう覚えています。

話を聖書に戻したいと思いますが、イエスは自らご自身の最期について弟子たちにお話しになりました。改めてその目的と意図について考えてみましたが、やはりイエスは、弟子たちがイエスの最期を迎えたときに、その事実が偶然や事故ではなく、神のご計画に従って迎えられることであり、しかもその最期が非常に残酷な十字架であっても、その十字架を受け入れることができるように、弟子たちの内面の準備をされたのではないかと思います。また、弟子たちが神のご計画を理解し、イエスから渡された大きなミッションをやり遂げるためにも、イエスの最期、残酷な十字架について、あらかじめお話しになられたのかと思います。

私は、改めてこの記事から学ぶことは、神は私たちのことをよく理解してくださっている、ということです。このポイントについて考えると、私は神を知る、神を理解する、神を学ぶことにやっきになって、神が私のかことを理解されていることに対する感度が大変低くなっていることに気づかされます。私たちは神のかことをもっと知りたい、学びたいと思いますが、それ以上に神は私たちのことをよくご存じであることについて、パウロはガラテヤ人への手紙でこのように教えています。

4:9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、

また、詩編ではダビデがこのように教えています。

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

私たちは、神に知られている存在です。それは、ただどういう存在か、どういう性格か、どういう状況かということだけではなく、私たちがどのような存在であり、私たちがどのようなものを必要としており、それをいつどのような形で私たちに与えるのが最善であるかを神はご存じである、ということです。

皆さん、この事実は私たちに大きな平安を与えます。神は私たちを知っておられます。それだけでなく、私たちの必要もご存知です。弟子たちに対して、彼らのミッションをやり遂げるためにもご自身の最期についてお示しになられたように、私たちもそれぞれの人生が最高の恵みと祝福で満たされるために、私たちの必要を最高のタイミングで満たしてくださる方です。私たちに必要なことは、そのことを、信仰をもって受け入れるだけです。もし、まだイエスをご自身の救い主として受け入れていらっしゃらない方がいるなら、皆さんの人生に必要なことを最高のタイミングで満たしてくださる方こそ、イエス・キリストであることを今日信じ、受け入れていただきたいと思います。神は、実にそういうお方なのです。

4.仕えるために来られた方

同じマタイの福音書 20:25-28 を開きましょう。

20:25 そこで、イエスは彼ら呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。

20:26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。

20:27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。

20:28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

イエスがこの世に来られた目的は、仕えることであり、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えることである、とイエスは教えました。

あらためて、人に仕えられる経験とはどういうことなのかを考えてみました。皆さんは、誰かに仕えてもらった経験はありますか？

聖書の時代で、人に仕えるということを考えるなら、やはり主人と奴隷という関係において、奴隷が主人に仕えることが思い浮かびます。現代においては、奴隷制度はほぼ廃止されているようですが、国連が12月2日を奴隷制度廃止国際デーと定めているように、一部の国と地域においては、まだ奴隷制度が存在しているようです。日本では、奴隷制度という言葉ではありませんが、戦前まで小作人制度があり、この制度は広義では奴隷制度に含まれるようです。奴隷という言葉には良い印象を持つことができないと思いますが、それは働く側、労働者側に働くことに権利を認めず、ただ義務として押し付け、労働者に選択の余地を与えないからだと思います。

イエスは人に仕えるために来た、と教えていますが、私たちの労働、仕事という観点で考えるなら、仕えるときがあり、仕えない時もあるということになるかもしれません。しかし、聖書の時代における奴隷制度から仕えるということを考えるなら、それは大変強い意味になります。どのような時間でも環境でも、仕えなければならないのです。仕える側の都合や状況など、一切考慮されないのです。徹底的に仕えるしかない。これが、聖書の時代における「仕える」という言葉が意味することでした。

イエスは、私たちに対して、ご自身の都合に合わせて、都合の良い時に少し私たちのために何かをしてくださるということではなく、私たちに「仕える者」としてこの世に来てくださったと教えておられます。しかも、この方は私たちのことをよくご存じであることを先ほどお話ししました。私たちのことを私たち以上にご存じである方が、私たちに「仕える者」となってくくださったのです。これ以上、私たちにとって都合の良いことはありません。私たちの成り立ちを知り、私たちの必要を知り、短期的な必要だけでなく長期的な必要も知っている方が、私たちに仕えてくださるのです。私たちは、神の取り扱いに対して、時々不安を感じ、神の御手が届いていないように思い、環境に対する不満や先行きに対する不安や焦りを覚えることがありますが、神は私が自分のことを理解する以上に私のことをご存じであるのです。この方が、仕える者として私たちのために全力で仕えてくださるなら、私たちは人生において何か不安を感じる必要はありますか？今、不足を感じるものがあっても、それは長期的に見てその不足を経験することが必要であるから、私たちをその状況に置いておられるだけです。もし、未来に対する不安があるなら、イエスご自身が、私たちのために休むことなく仕えてくださる方であり、目には見えないけれども、この世にあって目に見えるどのような存在よりもはるかに信頼に値する方であることを、今日、ご自身のこととして受け止め、受け入れていただきたいと思います。イエスとはそういうお方です。それを、聖書ははっきりと教えています。

5.イエスは私たちの罪のために死なれた

同じマタイの福音書 21:33-41 を開きましょう。

21:33 もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

21:34 さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。

21:35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりには袋だたきにし、もうひとりには殺し、もうひとりには石で打った。

21:36 そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。

21:37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。

21:38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』

21:39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

21:40 この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」

21:41 彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」

ここでイエスは、ご自分の最期が人によって殺されることを示されました。ぶどう園のたとえ話で、主人は農夫たちにぶどう園を造り、垣を巡らし、酒ぶねを掘り、やぐらを建てた上で、それを農夫たちに貸した、と教えています。農夫にとっては、ブドウの木の手入れをして、収穫の日を迎えれば、ぶどうを摘んで、ぶどう酒にするという仕事が任されたこととなります。

このたとえ話の主人は大変寛容な人です。農夫は、一から土地を開墾してぶどう園を作るのではなく、もうブドウの木が植わっており、垣も、酒ぶねも、やぐらも必要なものは全部そろっているぶどう園で、ぶどうの世話をするだけです。環境の整っているぶどう園で働いており、しかも主人は農夫に賃金を払うのではなく、収穫の取り分を受け取ろうとしています。農夫を尊重し、農夫に大変有利な条件で働かせています。ここまでも大変寛容です。こんな好条件で働けることは現代でもあまりないと思います。

ところが、この農夫たちは、取り分を受け取るために遣わされた主人のしもべを、袋だたきにし、殺し、石で打ちました。普通ならこれでアウトです。農夫たちは主人によって厳重な罰を与えられるはずですが、しかし、このたとえ話の主人は、前よりももっと多くのしもべたちを遣わします。人数が多ければ、農夫たちは素直に従うと考えたのでしょうか、あるいは主人の寛容さを示すことで反省し、取り分を渡すようになると考えたのでしょうか。しかし、しもべたちは同じような扱いを受けます。こうなると、これで絶対にアウトのはずです。これではもう庇うことはできません。しかし、主人はもう一度寛容な心を示します。このような悪い農夫たちに対して、自分の息子を遣わします。これまでに2度も、しもべたちを殺すような悪い農夫たちですから、このようなところに自分の息子を遣わすようなことは普通しないのですが、このたとえ話の主人は、農夫たちを信頼して息子を遣わしました。息子なら敬ってくれるだろう、これが主人の期待であり、農夫たちに対する信頼であり、最大の寛容であったと思います。しかし、残念ながら、この息子もぶどう園の外に追い出され、殺されてしまいます。たとえ話であっても、ちょっと気持ちが悪くなるような話です。実際ではありえないような話だろうと思います。

このたとえ話では、主人の息子を殺す理由は「息子の財産を横取りする」ことです。もちろん、こんな理由は許されるものではありません。実に理不尽です。主人の期待に応えないどころか、主人の寛容さに対しても悪をもって応え、最終的には主人が最も大切にしている息子さえも容赦なく殺してしまうのです。こんなことが許されることはありません。

このたとえ話を通してイエスが示し、教えられたことは、神はユダヤ人に対して、幾度となく神のしもべである預言者を遣わしたが、彼らは受け入れないどころか預言者たちを殺してしまっただけでなく、何度も神は預言者を送られたが、ユダヤ人は預言者たちの忠告や教えに従わなかった。最後に、神のひとり子であるイエス・キリストを遣わされたが、ユダヤ人はその最愛の息子、ひとり子さえも容赦なく殺してしまう、ということです。たとえ話での、主人の息子を殺す理由は「息子の財産を横取りする」ことでした。では、ユダヤ人たちはどうしてイエス・キリストを十字架にかけて殺してしまったのでしょうか。

イエス・キリストは、その生誕の時から十字架にかけられる時まで、ユダヤ人の指導者にとっては実に不都合な存在でした。生誕の時は、東方の博士たちによって「ユダヤ人の王として生まれた」ことが預言され、イエスが人々に教え始められたときは、律法学者の教えとは違い大きな影響力をもって、たくさんの人々に神の言葉を伝えました。病める者を癒し、心を痛める者の痛みを負い、神が与える大きな希望について証しました。イエスが語れば語るほど人々は励まされ、癒されましたが、ユダヤ人の指導者たちの憎しみは大きくなりました。なぜでしょうか。自分たちのできないことをイエスが行い、ユダヤ人の指導者が求心力を失い、ローマによってイスラエルが支配されることを恐れたからです。

ヨハネの福音書 11:45-50,53 にはこのように教えられています。

11:47 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くの人を癒しているというのに。」

11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」

11:49 しかし、彼らのうちのひとり、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。」

11:50 ひとりの方が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」

11:53 そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。

イエスの影響力が強くなればなるほど、自分たちの影響力が弱くなり、自分たちに都合の良い統治ができなくなる。これが、ユダヤ人の指導者たちが恐れたことです。自分たちに都合の良い統治を続けるために、人々を癒し、慰め、痛みを負われたイエスを捕らえて、十字架にかけました。

皆さん、ユダヤ人の指導者にとって、イエスは大変都合の悪い存在でしたが、それは私たちにとっても同じことです。イエスは私たちが思うまま、自分にとって都合の良い人生を送ろうとするなら、言い換えれば、聖書がはっきりと罪と指摘することに対してはどこまでも執着してしまう私たちの弱さを変えようとし、悔い改めようとし、イエスは私たちに大変都合の悪い存在となるのです。なぜなら、イエスはユダヤ

人の指導者たちに対して罪を示されたように、私たちに対しても罪は罪としてはっきりと示されるからです。イエスは、物理的には2000年前のユダヤ人の指導者によって十字架につけられましたが、聖書はあらかじめすべての人の罪が、イエスを十字架にかけるとを教えています。イザヤ書53:6にはこのように教えられています。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

神は、イエスがこの世に現れるずっと前に、預言者イザヤを通して、どこまでも自分勝手にしか生きることができない私たちの罪を、全部イエスに負わせることを示されました。私たちの罪が、イエスをこの十字架につけたのです。私たちが自分勝手な道に向かって行く中で犯してしまう様々な罪を清算し、赦し、贖うために、神は私たちを十字架につけるのではなく、身代わりとしてイエス・キリストを十字架につけられたのです。イエスは、私たちの罪のために十字架につけられました。神は私たちを赦し、神との正しい関係を回復させるために、この十字架の上でイエス・キリストを徹底的に裁かれました。このイエスの十字架があるからこそ、私たちは聖書を通してイエスの救いを受けることができるのです。

皆さん、イエス・キリストによって与えられる新しい人生、新しい命は、イエス・キリストを信じる前に持っている人生、命とはあきらかに違うものです。まだ、イエス・キリストを信じていच्छらない方にとっては、この人生と命を受け入れることは大変勇気がいることかもしれません。しかし、今日4つ目のポイントとしてお話しさせていただいたように、神は私たちに仕えてくださる方です。イエス・キリストの十字架による新しい人生は、私たちがイエスを信じることによって放棄する私たちの古い人生にはなかった、何物にも代えがたい大きな安心、平安を、あなたに与えることができます。神は、いつも皆さんのことを守り、支えてくださるからです。天地万物を創造された神が仕える存在であるなどあり得ないと思ってしまうかもしれませんが、神は実にそういうお方です。

最後に、イザヤ書40:27-31をお読みして、お話を終えたいと思います。

40:27 ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は【主】に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている」と。

40:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

40:29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。

40:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。

40:31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。

27節の「私」に、皆さんのお名前を入れてください。私たちは、思うようにいかない自分自身の人生や生活を憂い、このようにつぶやいてしまうことがあります。私たちは、時々理不尽な、不当な扱いを受けるときに、誰に対してということではなくても、不平や不満がこみあげてくることがあります。どうして私の人生にはこういうことが起こるのか。どうしてあの人は、どうしてこの会社は、どうしてこの社会は、と思ってしまうことがあります。もし、神が存在するのならなぜこんなことが、と思ってしまうことがあります。しかし、イザヤ

は一つの大きな秘訣を教えました。主を待ち望む、神を待ち望む。待ち望む者は新しい力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。このような人生を、神はイエスの十字架を通して私たちに与えることを約束されました。イエスを受け入れ、神を待ち望むなら、神は私たちに力をお与えになります。内側からあふれ出る、無限の力です。

いかがでしょうか。もし、まだイエス・キリストをご自身の救い主として信じていない、受け入れていない方がいらっしゃるなら、今日、イエス・キリストを救い主として、神として受け入れませんか？また、既にこの方を救い主として、神として受け入れていらっしゃる方は、今一度自分自身が受けた新しいいのち、救いに向き合っ、神が私たちにどれほど大きなことをしてくださったのかを再確認し、イザヤが預言したような力に満ち溢れた信仰生活を、今まで以上に実感してみませんか？

祈りましょう。